



英語授業を通じての実践

~ How To Speak から What To Speak へ ~

広島工業大学附属広島高等学校
教諭 森山 幸

1. 英語教育における変革

ここ数年、ただ読んで訳すといういわゆる訳読式の明治以来続けてきた日本の英語教育が見直され、国際社会に対応できるような英語力を身につけることが求められるようになってきています。これによりただ意味を理解するというだけでなく、自分の意見や考えを英語で表現できるという発信型の英語への転換が求められるようになってきました。そのため中学校や高校ではオーラル・コミュニケーションの授業が導入され「聞き」「話す」ということに、より重点が置かれるようになりました。

しかし、「聞く」ことと「話すこと」は英会話学校での学習や、外国で数ヶ月暮らすことでできるようになります。ただ「話す」ことや「話し方」を練習するだけでは、本当の意味での国際社会で活躍する人材に求められる英語力を身につけたと言うには不十分です。言葉の流暢さよりも、「何を話すべきか」、つまり「話すべき内容を持っている」ということがこれからの真の国際人の証明となるのではないのでしょうか。

受験のためだけの英語ではなく、英語の学習を通じて将来国際人として幅広い知識を身につけることができるような授業を目指してきました。その一環として担当の高校2年生（現高校3年生）に対して、昨年11月から既成の問題集や通常の教科書に抛らず「英語を通じて世界が見える教材」「内容に関して他教科との連携が図れ、発展させることができる教材」という事を念頭に置いて、「クローン、臓器移植、遺伝子工学」を一連のテーマとして授業を行うことにしました。

2. 実践方法

クローンに関しては2つの英文を取り上げました。どちらもクローン羊の「ドリー」について扱っており、クローンの抱える倫理的問題とクローンの科学的意義に関するものです。一つの内容に関して科学的観点と、倫理的観点から捉えた2つの文章を読むことで、一方的な観点にとらわれずに読むことができました。

最初の英文は“Cloning and Genetic Engineering: Designing Bodies for the future?”「クローンと遺伝子工

学：未来の人体設計」というタイトルの英文で、クローン技術によって生物を創り出すことについて、「やがては人間はクローン人間を作り出すことも可能である。果して人間は神として振舞うほどの知恵や権利があるのだろうか」という倫理的な観点からクローン技術の利用に関して疑問が投げかけられている文章でした。昨年は海外でクローン人間が生まれるという報道もあったことから生徒の関心も高く、クローン人間を作り出すことの是非だけでなく、人間にとってクローン技術がもたらすであろう様々な可能性について考える機会を与えることができました。

2つ目の英文は“Body-Copies”というタイトルで、どのようにクローンが作られるか、またクローン技術がどのような形で人間にとって役立つかという科学的観点から捉えた文章を読んでいきました。最近の受験に必要とされる基本的科学用語を理解するだけでなく背景知識となる生物学の内容にも多く触れており、より深い理解を求めて生物の教員に詳しく質問をした生徒もいました。

また、クローン技術により可能になることの一つとして、臓器移植のために自分の細胞から臓器を作り出すことも可能であるということを述べた所があり、そこから発展させて臓器移植に関する英文に進んでいきました。

まず最初に“Creating New Body Organs”というタイトルの英文に取り組みました。これは臓器移植が何故困難であるのか、また近い未来臓器も自分の細胞を用いて創り出したり、患者の身体の健康な部分の細胞を直接損傷を受けた部分に注入し治癒することが可能になるであろうという科学的及び医学的視点から述べた英文で、生徒も興味を持って読むことができたようでした。

臓器移植をテーマにした英文の仕上げとして朝日新聞の論説文の英訳“Organ system needs a transplant of donor will”(2002年10月朝日新聞掲載)を授業で用いました。この文では現在の日本の臓器移植システムの抱える問題、特に14歳以下の子供に対する臓器移植に関する問題点と臓器移植が実際には余り実施されてい

ないのはなぜかという問題を取り上げています。論説文の英訳ということもあり量的にも多く、その上法律的、医学的、社会的観点から現在の臓器移植の抱える問題点に鋭く切りこんだ文章で、高校生には最初は背景知識も含めて一見かなり難しく思えたようでした。特に前半部分は「なぜ14歳以下の子供は臓器移植を受けることができないのか」に関して法律的な面から説明がなされています。これは満15歳に達していなければ遺言が残せないという民法上の事項によるものですが、法律用語が多く、法律的内容や政治的問題に関する部分では背景知識の乏しい生徒にとっては理解のやや難しい部分もあったようでした。

後半部分では脳死患者からの臓器移植が数例しか行われておらずまたその件数も増えていないという現状が伝えられており、それは臓器移植法自体の不備と国民の臓器移植に対する関心の低さが原因であると訴えています。

この文章を通じて、普段ほとんど知る機会のなかったこと、例えば遺言を残すことができる年齢が満15歳以上であることや、脳死でなく心停止後でも腎臓と角膜は移植できることなど、初めて知ることも多く生徒だけでなく私自身にも勉強になりました。

3. 生徒の反応

今回「クローン・臓器移植・遺伝子工学」をテーマにした英文を読んでいく中で、生徒には一語一句にこだわるのではなく、文章全体の訴えようとするところを捉えさせるようにしていきました。

授業方法としては、それぞれの文章について段落ごとにメイン・トピックスに関わる質問事項を用意し、それぞれの質問に答えていくことで内容を把握できるようにしました。最初にクローンに関する文を読んだ時には専門用語も多く、ひとつひとつ訳をしようとする生徒もいましたが、読み進むにつれてどの英文にも科学的な基礎知識や同じ専門用語が何度も繰り返し出てくるので、最後の臓器移植の論説文を読む頃には生徒も専門用語にも慣れてきて訳にこだわることなく全体をスムーズに読めるようになっていました。

こちらが思っていたよりも生徒は内容をはるかにしっかりと捉えており、英語の教員からでは完全に理解することができない生物や法律に関しては、積極的に他教科の教員に質問をして確認をしたり、臓器移植に関しては自らインターネットや新聞で背景知識を得ようとした生徒もいました。また、何人かの生徒は実際にドナーカードを保持しており、思ったよりも臓器移植に対して関心の高いことを知り、こちらの方が驚か

されたりもしました。

一連のテーマを持って読んでいったことで、生徒のそれぞれの内容に対する理解力も次第に深まっていたのではないかと思います。特に今回のように社会的、科学的問題を取り上げた文章の場合は、普段から新聞をよく読み、メディア等からの情報に関心を持っている生徒はやはり理解も早く、内容的にも確に把握できていました。また、クローンや遺伝子工学など生命倫理に関わる様々な問題を知ることによって、人間だけではなく全ての生命に対する慈しみを育てる人間になってもらいたいと願っています。

4. 展望

高校の英語では、大学受験を目的としてただ単に文法や読解を教えることに終始しがちな部分があります。英語としての基本的な事項を教えることももちろん必要です。しかし、現在必要とされているのはただ単に受験のための英語ではなく、英語という教科を通じて他教科の分野や、社会的内容にも触れさせていくことです。

また、今回の授業を契機として英語を通じて様々なことに関心を持ち英語以外の知識も積極的に吸収することがこれからの時代には不可欠である、ということも少しでも理解してくれたのではないかと思います。これからも学習したことが一つ一つ心の中に残り、生徒たちにとって将来何らかの形で役立つものになることを目指し、“How To Speak”(「話し方」)から“What To Speak”(「何を話すべきか」)への脱却を図っていくことで、より発信型の英語力を培うことができるように授業に取り組んでいきたいと思えます。

本校では高校3年生で人間科の授業「生と死」においてホスピスケアに携わっておられる本家先生の講演を聞く機会があります。本家先生の講演の前に「安楽死とホスピス」に関する英文を授業で取り上げる予定です。これによって生徒たちに今回の授業で行った内容を、生命の大切さということも踏まえて新たに様々な局面から発展させ考える機会を与えていければと望んでいます。

出典：“Frontiers in Science” by Yvonne Stapp

“Environment and Health”

(以上成美堂)

The Herald Tribune/ The Asahi Shimbun